

開 会 挨 拶

荻 野 和 郎

日本医療機器産業連合会 会長



皆様こんにちは。当市民フォーラムを主催させていただきます、日本医療機器連合会会長の荻野でございます。本日は、ご多忙の中、市民フォーラム「頭の病気―予防・診断・治療の最前線―」にこのように大勢の方にお集まりいただきまして、誠に有難うございます。

主催もとは、お手元のパンフレットにもございますが、当連合会と当連合会が事務局を担当しております日本の医療機器産業技術の向上と国際競争力の向上を図ることを目的として産・官・学一体となって推進すべく編成されました「医療技術産業戦略コンソーシアム」（通称METIS）との共催となっております。METISの共同議長をお願いしております川崎医療福祉大学副学長の梶谷先生には、最後のところで挨拶をお願いしております。

さて、この市民フォーラムは、国民の皆様に、日常ほとんど目にする機会がないものではあるのですが、今日の「医療」、すなわち診断、検査、治療に欠くことのできない医療機器というものを広く理解していただき、将来へ向けてよりよい医療サービスが構築され、普及してゆく一助にしたいということで始めたものでして、今回で第5回目となります。

日本医療機器産業連合会は、大型の画像診断機器から小型の心電計やモニター、さらには歯科関係、眼科関係、衛生材料や各種消耗品などを対象に、20の団体、4,900社から構成されており、扱う製品は30万種とも40万種とも言

われ、大変な数、種類があり、連合会でも十分把握しきれないほどであります。しかも、一つの製品が長年にわたって改良・改善を重ねて使用され、常に技術革新、改良・改善が求められる物であるために、医薬品とは大きく性格が異なるものと言わざるを得ない状況にあります。

最近10年位を見ますと、日本製の機器の輸出は概ね横ばいであるのに対し、海外からの輸入、特に先端治療機器を中心に輸入が大幅に増加しているところであります。すなわち、日本の医療機器産業が衰退気味であり、日本の先端治療が海外の機材に依存する面が増大しつつあるということです。

また、日本では医療機器の製造・販売の承認取得に時間がかかることから、日本の市場では、海外の最先端機材が使用できず、2世代、3世代遅れたものしか使用できない、中には、投資効率が悪いから日本市場へは輸出しないという事態も発生する状況にあります。すなわち、日本の患者さんは世界最先端の医療機器の恩恵を受ける上で、大きな時間的な遅れ「デバイス・ラグ」が発生しています。

一方、このところ「医療崩壊」と言われる状況があらこちらで発生し、世界に誇ってきた日本の医療体制は今後どうなるのか懸念がだんだん大きくなりつつあります。これまで、国民皆保険制度の元、国民男女の平均寿命は先進各国の中でトップクラスを維持し、なおかつこれに要する費用はGDP比で、先進各国の中で最少のレベルにありました。

これが、長年にわたる医療費の削減などにより、いまや崩壊と言われるまでに凋落しつつあることは誠に嘆かわしく、これを何とか食い止め、少子高齢化時代にあってこそ、子供を増やし、労働力を確保し、豊かな長寿社会を構築し維持してゆく必要があります。

このためには、医療、介護、健康といった分野は、極めて大きな、生活に密着したサービス産業と言えるわけで、その体制を強化・充実させることが大きな雇用を生み出し、関連する産業を活性化させ、関連する医療市場を大きく発展させることになり、今後の日本社会にとって是非とも必要なことと思うわけです。

幸い新政権では、医療を立て直すということがマニフェストに記載されているところでありますので、今後具体的な施策がどのように実行され、成果がどう出るのか出ないのか、見守ってゆきたいと思います。

今回のフォーラムは読売新聞のご協力をいただき、合計4回紙面上に紹介させていただきました。800名の募集に対し、2300人を超える方から参加のご希望が寄せられ、このたびのテーマにご関心が多いことを知ったところでございます。

本日は、日本を代表する4名の著名な先生方が最新の予防・診断・治療についてご講演・パネルディスカッションをしていただくことにしております。

近年、医学やライフサイエンスの分野では、「21世紀は脳の時代」という言葉が聞かれ、今まさにこの分野が大きく解明され、発展する時代になりつつあると思うところでありまして、従来困難と思われていた疾病が技術の革新により新たな手段で治療する可能性も高まってきているように感じます。

わが国には、世界最先端のエレクトロニクス技術とかコンピュータ技術、精密加工技術、各種材料・素材技術など最先端の医療機材を開発する要素技術は数多くあるわけですが、特に先端治療機器分野で遅れが目立つのは残念なことです。各種先端技術を巧みに活用しあえる環境を作り、世界初の革新的医療機器を開発し、医療の発展に寄与すると同時に、日本の経済にも大きく貢献したいものです。

本日のこのような機会を通じて、日本の医療や医療機器を一層ご理解いただき、皆様のご理解、ご支援のもとに日本の医療機器産業がますます発展するよう、また、そのことを通じて、皆様により良い、より優しい、よりコストの低い医療・介護サービスが迅速に提供される環境が整ってゆくよう、日本医療機器産業連合会としても激しい国際競争のなかにはありますが、努力を重ねてゆく所存です。引き続き、皆様のご理解、ご支援をお願い申しあげまして私のあいさついたします。有難うございました。

プログラムコーディネーター挨拶

プログラムコーディネーター

桐野高明氏

国立国際医療センター 総長

1972年東京大学医学部卒業。米国 国立衛生研究所(NIH)へ留学後、1982年帝京大学医学部脳神経外科に勤務。1986年帝京大学医学部脳神経外科助教授、1992年東京大学大学院医学系研究科脳神経科学教授、2003年東京大学副学長、2008年より現職。平成14年度 美原賞、国際脳循環代謝学会 Lifetime Achievement Awardなどを受賞。



皆さん、こんにちは。第5回医療機器市民フォーラムに大勢おいでいただきまして、誠にありがとうございます。

今回は頭の病気ということで、頭の病気の中でも特に頻度も多く、しかも治療に時間を要する、あるいは治療自体がまだ発展途上にあるような病気をとりあげることにし、脳卒中、アルツハイマー病、うつ病について、その道のエキスパートの先生にお話をしていただくことになりました。私は本日のプログラムの立案をした1人としまして、全体を概観するようなことをごくかいつまんで一言ほど申し上げたいと思います。

1つ目は、病気というものが時代によって非常に大きく変わってきて、その中で頭の病気が、これからだんだん社会にとって大きな問題になってくると言うことです。

2つ目は、治療法が変わってきますと病気の様相が非常に大きく変わってきます。これはここにおいでの方々が過去に経験されたことと思います。近年、医療が著しく進歩したわけですが、ただその結果だんだん人間が死ななくなるかという点必ずしもそうではなく、最後は何か病気になるわけ

戦争直後は何といっても結核という感染症が非常に大きな問題で、その後、高度成長とともに脳の血管障害、特に重症の脳出血が増えてきました。そして1980年代以降はやはり一番難しいというか、人を死に至らせるという意味では「がん」の比重が非常に大きく、全体の3分の1ぐらいの方が「がん」で亡くなります。ただ、これからは高齢社会ということもあり、人が最後に何で亡くなってしまうかということも、人生の途上においてどのような病気になるかということが大きな問題であって、その中でも最近では頭の病気、特に本日お話しいただきます「脳卒中」、「アルツハイマー病」、「うつ病」が重要になってくると思われます。

プログラムに書いてありますように、「脳卒中」については松本先生、「アルツハイマー病」については井原先生、「うつ病」については樋口先生に詳しくお話をいただき、又後程ここで討論もしていただきますので、お聞きになっていただきたいと思います。

もう一つは、医療の進歩によって病気の様相は相当変わるわけですね。例えばもし今抗生物質が全く皆無で、ウイルスも含めた細菌による感染症に我々が無力であるとすれば、これ

は全く違います。世の中の様相さえも違ってくるかもしれません。

一番最近の著しい例の一つは「胃かいよう」です。昔は「胃かいよう」で重症になって吐血をしたり、手術を必要としました。その後、いいお薬がだんだん開発されてきて、お薬を飲み続けさえすれば「胃かいよう」の症状を抑えることができるようになってきました。1980年代初めには、オーストラリアのウォーレンとマーシャルが、ある細菌が「胃かいよう」の原因になっているというとてもないことを考えまして、色々と研究をした結果、どうもピロリ菌が「胃かいよう」の非常に大きな誘因になっているということを見つけました。最初はみんな信じませんでしたが、どうもかなり確からしいという話になってきて、しかもマーシャルは自分でピロリ菌を飲んで、その症状を再現するという乱暴なことをやりまして、実際に学界の定説になってきたわけですね。2005年に彼らはノーベル賞を受賞しています。その結果、今度は薬を飲み続けなくても、ピロリ菌を除菌してしまう薬を1週間飲めば抑えられる。しかもその結果、「胃がん」さえ相当程度抑えられることが分かってきました。

このように病気の治療法は大きく進歩してきていますが、ただ「頭の病気」についてはまだまだ難しい面もありまして、これからまださらに進歩させなければならない、あるいは基礎メカニズムの解明によってさらに進歩する可能性のある病気だと思います。また、高度な診断法も徐々に開発されてきつつありますけれども、まだまだ限界のある領域でもあります。そういう意味で本日の3人の先生のお話をお聞きになりまして、皆さま方の健康に少しでも役に立てれば、プログラムを計画した側としては大変うれしいことです。後はこの3人の先生のお話をぜひゆっくりお聞きいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。